

探検家シャクルトン

—現代の求めるリーダー像—

藤田 宗和



私は幼児の教育という明るい領域とは対極をなす、犯罪・非行臨床心理学を専門としている。この領域は、広く人間一般の行動を対象とする心理学の中では、例外を対象とする分野である。そのためか、読書の関心も例外や特異な状況のものが好きだ。特に海洋冒険小説が好きである。海という自然是、軟弱な人間関係を拒否し、その人間の

持つ人間の本質をあらわにしてしまう場であるからである。

ところで、今回取り上げるのは、探検家シャクルトン (Shackleton) であるが、名前を知らない人が多いと思う。探検家では最初に南極点に到達したアムンゼンやそのライバルであるスコットと同時代の人である。その陰に隠れてシャクルトン

は、日本では無名である。なぜなら、彼は、南極縦断の壮舉を企図したが、結局失敗した人であるからであろう。しかし、最近欧米で再評価されてゐるという。

その理由は、シャクルトンのリーダーとしての卓越した資質にある。探検に失敗したのになぜか？ それは、彼の探検隊は一年半もの間南極海の氷に閉じ込められていたのだが、彼は、二十七名の隊員のうち、一人の犠牲者も出さずに極寒の地から連れ帰ったからである。その影響を受けてか、我が国でもシャクルトン関係の本がいくつか出版され、三冊ほど読んだ。『エンデュアランス号奇跡の生還』（アーネスト・シャクルトン著

奥田祐士訳 ソニー・マガジンズ）は、シャクルトン自身の手記であり、『エンデュアラנס号漂流』（アルフレッド・ランシング著 山本光伸訳 新潮文庫）は、探検記録、隊員の日記などをま

とめたものであり、『史上最強のリーダー シャクルトン』（マーク・モレル、ステファニー・キヤパール著 高遠裕子訳 P.H.P.）は、そのリーダーの資質を解説したものである。

シャクルトンの探検の経緯は以下のとおりである。一九一四年、第一次世界大戦が始まつた年に、彼は、エンデュアラヌス号に乗つて南極横断の途につく。探検開始早々、南極大陸に到着する前に、船は零下三十度以上の寒風吹きすさぶ、流氷原に十ヶ月近く閉じ込められる。氷の圧力によつて船が破壊された後は、犬橇と救命ボートに載せられるわずかな食料や備品を持つて、二十七名の隊員を引き連れ、氷原をさまうことになる。

その後、氷原が溶け出し、足元が崩れる中、三隻の救命ボートで荒れる南極海に乗り出す。家より大きな荒波を乗り越え、近くの島にたどり着くが、人のいる島まではまだ一三〇〇キロメートル

もある。そこで、彼は五人の隊員と一隻のボートで救助を求めて再び南極海に漕ぎ出る。やつとのことで人のいる島に着くが、捕鯨船の基地は島の反対側であった。食料も尽き、決死の覚悟で山と氷河を横断し、捕鯨船の基地に助けを求めることができた。しかし、彼の仕事は終わらない。すぐに周囲を動かして、救難船を確保し、仲間のいる島へ救助に赴く。あと数日で再び流水が島の周りを埋め尽くす寸前、残った隊員を無事救助したのが一九一六年の夏であった。

装備も機材も現代と比較すると貧弱な二十世紀初頭に、圧倒的な自然の力を前にして生半可なりーダーシップではとうてい不可能な困難を克服したのである。それも隊員全員を救い出したのである。こんなところから、いろいろな意味で危機状態にある西欧世界で、リーダーの手本として再評価されたのであろう。

極寒の地で、いつ果てるともない生活が続くと、いう極限状況では、人間は陰鬱で絶望的な気分に陥ることが普通である。実際十九世紀末に南極海に閉じ込められた船では、乗組員は憂鬱になり、集中力を失い、食事もそれなくなり、最終的にヒステリー症状を起こす者、暗闇の恐怖のために心臓発作を起こした者もでたという。しかし、彼の探検隊は驚くほど明るい。明日の食料にも事欠き、生命の危機に直面する状態でも、晴れた日には氷原でサッカーや犬橇レースを催している。また、ブリザードが吹きすさぶ暗黒の中、湿度の高い、しかも煙いテントの中で、詩の朗誦会、合唱会、バンジョーの演奏会などをを行っており、とても遭難したものとは思えない。トラブルはもちろん幾つかあったが、氷原の中の冷たくじめじめしたテントでの生活について、隊員の日記には、「なんともつらくて、粗っぽくて、しかも楽しい

生活だ」と記されているのが印象的である。

彼のリーダーシップの特徴は、決断力、慎重さ、計画性など一般的にいわれるリーダーシップはもちろんあるが、人間の本質に対する鋭い洞察と信頼であろう。具体的には、彼は、食料の分配、仕事の役割、寝場所の指定などを他の隊員と平等にするよう求めた。自分がやらないことは他人に命令せず、むしろ問題のある隊員を意識的に自分の周りに集めた。また、各人の能力・適性を考慮し仕事の役割を与えたが、同時に、全員に逆の仕事を任せた。科学者が床磨きを行い、航海士が料理を作り、甲板員が科学標本の採集を行った。仕事には厳しかったが、先に述べたように同時に遊びを大切にした。さらに、一対一のコミュニケーションを大切にし、隊員を人前で非難しないし、叱つても後腐れを残さない。加えて、いろいろな情報を隊員に公開し、助言を求める。

しかし、最終決断は彼自身が行った。

すなわち、人は公平平等に扱われれば、不満を持たない。上位者が noblesse oblige の高い身分に伴う道徳上の義務を遵守することを期待する。

また相手の大変さを認識することで協力精神が生まれる。緊張のあとにリラックスすることで精神の均衡を保てる。人は皆の前で恥をかくことに耐えられないが、頼りにされると嬉しいといつた人間の本質を、彼は無意識のうちに知悉していたに違いない。その背景には、人間に對する基本的な信頼がなければこのような行動はとれないといえる。特にどのような状況でも樂観的に考え、明るさを失わない彼の振る舞いに、隊員は希望を鼓舞されたといえる。加えて、彼の手記には、悲壯な決意や氣負った人命尊重などの言葉は一言も記されていないのである。その結果、彼の探検隊は、全滅してもおかしくない状況にも、シャクル

トンを中心に一致協力して、困難を克服したといえよう。

最近わが国も、戦後最大の経済的、文化的な危機に直面しているが、それを立て直すべきリーダーの不祥事があとを絶たない。また、何年か前の高校生の意識調査でも、ヒーローという言葉から連想する人は、「スポーツ選手」、「映画の登場人物」、「マンガの登場人物」、「歌手・シンガー」が大半を占めていたのを読んで驚いた。青少年のヒーローのイメージは少なくとも社会を動かすリーダーではないようだ。最近の意識調査でも、人に迷惑を掛けても自分の利益を主張するなど、利己主義的な行動を取る人が三割もいることが報じられており、日本全体に悪しき個人主義が蔓延している状況にあるといえよう。

このような状況で、新たなリーダー像として、強靭で、かつ人間を信頼し、大切にする仲間に希

望を与えてくれるシャクルトンのような人物を期待する人が増えることを望むものである。特に子どもたちの心の中に、このような明るく、骨太で、前向きなリーダーが定着するようになればと思う。

ちなみに彼の船の名前は「エンデュアランス」、すなわち「不屈の精神」である。

（お茶の水女子大学）